動物園だより

No.11
昭和50年1月2日発行

新年への提言
昨年のあゆみ

動物園長 林田禮俶

明けましておめでとうございます。

月日のたつのは早いもので、この「だより」も47年から発刊して早や三才の春を迎えることになりました。そして私どもは当園を訪れて下さった多くの方々に、このしおりをとおして動物を少しでもたくさん理解していただき、ひいては動物園と市民の皆さんとのつながりを深めていきたいと考えています。

さて年のはじめにあたり、多少おこがましいところがありますが、私ども動物園にたずさわる者の考えの一端を述べてみたいと思います。

現在地球上に住んでいる動物の数は100万種といわれていますが、彼等が地球の歴史と共に、きびしい自然界に生きぬいてきたものは何であったのか、それはおそらく彼等自身の子孫繁栄への夢であり、そのために自らが身を守るための手段として習性を身につけることからはじまります。

しかもそれは、食う食われるの食物を介してのからみあいの中にあって、生物界のバランスを保ちつつ共存することを前提としており、ある生物が異常にふくれあがったり縮まったりすれば、自然はうまくコントロールをはかってバランスを保とうといたします。

その中にあって私たち人間も生物界の一員であるという認識を深め、少くとも私たちが作為的に自然を破壊することのないよう……かりそめにも私たち自身の墓穴を掘ることの愚をひきおこしてはなりません。

私たち人間は、ある意味では生物界のリーダーであり、そういった自然界のおきてを私たちも守ることによって、生物としての正しい共存があり、また人間にとって自然が如何に大事であり楽しいものであるか、そしてその楽しみを将来失わないよう心がけようではありませんか。

昨年は動物園にとって近年にない意義深い行事が重なり、ほんとうに記念すべき年となりました。

正月は純白なセーターに黒のビロウドの襟巻をしたクロエリハクチョウの誕生からはじまりました。このハクチョウは南米の原産で、数少ない貴重な水鳥として当園で繁殖率のよいことは全国の動物園仲間でも定評となっており、親子揃って水上でたわむれる様は、一幅の華麗な画を見ているようで、新鮮な正月気分にひたることができます。

3月には身障者のためのモデル街づくりの一環として、体の不自由な方のトイレが建設され、ついで4月には市民待望の爬虫類館が完成しました。19日のオープンには舩橋市長を迎え、市内のよい子たち多数が参加してテープが切られ、ワー大きなトカゲや、これがカメレオンか？など子供たちの楽しそうな声を聞きながら公開することができました。

5月にはいって、10年前姉妹都市ケルンからいただいたエボシドリがかわいいヒナをかえし、順調に発育してはじめて繁殖に成功しました。

6月にはアメリカ、フィラデルフィア動物園と動物交換の話がまとまり、日本では珍らしいアメリカオシ、アメリカヒドリ夫々6羽がやってきました。

暑い夏にはいって、小学生の夏休みを利用したサマースクールが8月1日から開かれ、元気な子供たちが集まり例年の3倍の申込みで5日間開校しました。

夏中かけて行なわれた豆画伯たちによる動物画コンクールも質量共に例年をしのぎ盛況でした。

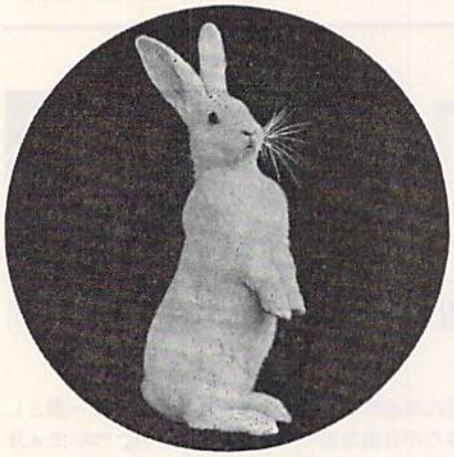
9月は姉妹都市キエフ市からはるばる珍らしい北国の鳥、シロフクロウとソウゲンワシが京都市に贈られ、両市長によってテープが切られ公開されました。

10月にはこれまた友好都市西安から友好団の方々が当市を訪問され、そのかたわら動物園も視察していただき、当園からご訪問記念として友好団に対し、ニホンキジの標本一体をお贈りし、チンパンジーなどが手をたたいて歓迎する園内をくつろぎながら熱心にみていただきました。その後両市の間に友好のきずなとして、動物交換の話も進められており、動物使節の相互実現も遠い話ではありません。

そしておしつまった12月、キリンの赤ちゃんが無事誕生し、5度目にあたる今回のは始めてのメスでした。

このように昨年は数々のおめでたやら行事が重なり、繁殖した動物の数は36種、206点、自然保護の一環として行なっている野生鳥獣の保護した数は72種、221点にも及び、当園も市行政の一翼を担って活躍した年となりました。

1975年、今年はウサギの年であり、市民の皆さんからも、ウサギのように愛され、親しんでいただく動物園でありたいと希います。



ピョン吉君のこごと

うさぎ年なので……

今年はうさぎ年なので、毎日、おとぎのくにでこども達の相手をしているうさぎのピョン吉君のところへあいさつにゆきました。ピョン吉君は、木造の四階建てアパートにすんでいます。入口は金網でできており、外から部屋の中がみとうせるようになっています。彼はこのアパートの三階に住んでいるのです。といっても、階段がついているわけではありません。家への出入は飼育のおじさんがしてくれるのです。床にはあたたかい稲わらが敷いてあり、食べものと水はいつも部屋にあるので、ピョン吉君はこの家が気に入ってはいるのですが、外へでたい時に、自分でできることができないので、ちょっぴり不満ももっています。そっと部屋の前までいってみると、どういうわけかいつもと様子がちがいます。いつもなら好物の草をもぐもぐと食べていたり、長い耳をぴょんとたてて眼玉を光らせ、〈誰が近づいてきたのかナ〉と足音をじっと聞いたりしているのですが、今日はちがいます。耳は背中にくっつけて眼を閉じ、あごとおなかを床におとしています。

ピョン吉君のいいぶん

〈こりゃアどうもヘンだゾ。ピョン吉君、どこか具合でも悪いのかナ……？〉と思いながら、そっと声をかけてみました。

「ピョン吉君、新年おめでとう。今年は君の年だよ。がんばってゆこうよ。」

「……？」

「あのネ、人間の世界ではネ、去年がトラ年で今年はウサギ年なんだ。もっとも今年がウサギ年だときめているのは日本だけのことかもしれないけど——。とにかく君には、ハリキッてもらわなくてはならないのよ。おい、ピョン吉君?!」

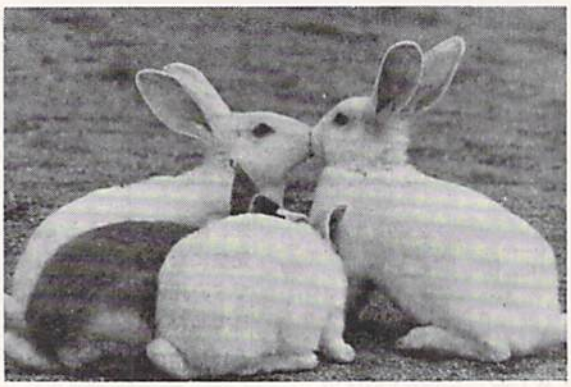
「ピョン吉君、ピョン吉君と気やすく呼ばんといてんか。なんやお前ら人間は。今までオレ達ウサギをどれだけひどい目にあわせてきたか考えてみたことがあるのんか。この四階建てアパートの住人をながめてみ。一階のオッサン、二階の年とったオバハン、それに、年末に入ってきたオレのとなりの新入りニイさん。みんな家庭で飼われていたものばかりやデ。今朝もとなりの新入りニイさんが、人間たちのみずくささをしみじみと話してくれたデ。ニイさんがいうには、生まれてまだ1カ月もたたない頃、とつぜん母親と離されて繁華街の露店につれていかれた。そこには、同じ境遇の仲間がいっぱいいたということや。人間は、こともあろうに、オーストラリア産のなんとかウサギだといって、別の人間に売りつけた。可愛らしい、といってニイさんを買いとった人間は、しばらく箱に入れて飼っていたが、エサといえばアメ玉にビスケット、はてはチョコレートまで口の近くへもってきて、たべよ、たべよとせきたてる。われわれウサギがこんなもので育つと思っている。おまけに売っていた人間が、「水をやったらあかんデ」といったので、のどがかわいても一滴の水ものましてくれへん。そんなことで、体はやせるし歯ばっかり長くのびてしまうし、おまけにいじりまわすしで、その頃は、もう生きた心地もせんかった。その内にみんな熱がさめてきたのか急にニイさんには近よらんようになった。かろうじてエサを入れにくるだけ。体はよごれてベトベト。自分でもいやになっていた頃、ちょうどニイさんを買ってほしいとねだったこの家の娘が冬休みになり、年末と正月をどこやらで過すことになった。ついてはニイさんがじゃまになり、〈動物園へ寄付してやろう〉ということになって、このアパートへたどりついた、とマァこういうふうに新入りニイさんは言うているのや。

どうや、オレが腹をたてているわけがわかったか。

そもそも生きものを飼う時はやナ。せめて飼い方ぐらい調べて、飼えるかどうか見通しをつけてから飼ってもらわんと、オレ達動物の方はたまったものではない。そりゃァオレだって、いつまでも可愛いいままでいたいとは思っていたが、エサを食べるから大きくなるのはあたり前で、大きくなってしまって可愛いくないからもう飼うのはいややといわれても、われわれウサギの方も困ってしまうがナ。これはなにもウサギだけの問題とはちがうデ。ニワトリにしてもサルにしてもカメ・ワニにいたるまで、みんな同じことや。だいたい生きものをペット屋さんや露店でちょっとみて、〈可愛らしいから買いましょう〉というような態度ではあかん。ブラウスやくつ下買うのとワケがちがうのやデ。その辺のところを、お前さんのなかまの人間達によういうときや。一階のオッサンや二階の年とったオバハン、となりの新入りニイさんみたいな不幸なウサギ達がいないようになったら、オレもはじめて〈ウサギ年や、おめでとう！〉と心から言うワ。それまでおあずけや」。

ウサギと人間

ピョン吉君にどなられて、仕方なくトボトボと歩いてかえる帰りみち、いろんなことが頭をかすめました。ウサギとカメのかけっこの話、いなばの白ウサギ、カチカチ山でタヌキをこらしめたウサギのことなど、また、歌ではウサギのダンス、ウーサギウサギなにみてはねる……。考えてみれば、私たち人間とは、かなり密接な関係があったようです。もっとも、民話や歌にでてくるウサギの大部分は、ピョン吉君の仲間ではないノウサギの方だと思うのですが。



ノウサギとカイウサギ

ノウサギとカイウサギは、形態的にも習性的にもいろいろと異ったところがあります。

ノウサギはカイウサギに比べて耳が短かく、また、地面のちょっとしたくぼみのような所へこどもをうみます。生まれたこどもは全身に毛がはえており、数日後には自分で歩きだすことができます。一方、カイウサギはもともとヨーロッパから北アフリカにかけてすんでいるアナウサギを飼いならしたもので、耳もノウサギよりは長く、生まれたこどもは赤はだかで眼もあいていません。そして、名まえが示すとうり、穴を掘って、そこで出産するのですが、カイウサギとして飼いならされてからは、穴を掘る場所がなくてもわらなどで巣をつくり、自分の毛をぬいて、そこへこどもをうみます。ピョン吉君も、お母さんウサギがこうして準備をしたところへ生まれてきたのです。

ウサギの活躍

歌や民話だけでなく、ウサギはわれわれ人間のために、おおいに役に立っています。

中でももっとも活躍しているのは、医学・薬学の分野でしょう。いま、人間にとって（もちろん動物にとっても同じですが）いちばん恐ろしい病気の1つである癌の研究でも、ウサギは大活躍をしました。ウサギの耳へ毎日タールを塗り続けて、遂に人工的な癌をつくることに成功し、癌研究の途が開かれたのです。癌だけではありません。動脈硬化の研究でも、高血圧の研究でも、また、新しく開発された薬の試験でも、およそウサギが顔をださないところはないといっても過言ではない程、実験動物として人間の役に立っています。

私たちの動物園でもウサギにはいろいろとお世話になっています。おとぎのくにでは、こどもたちが生きている動物を直接自分たちの手でふれて、見たり聞いたりしただけではわからない〝何か〟を体験してもらっています。モルモット・ヤギ・サル・フクロウ……いろいろいますが、ウサギもここで活躍しています。もちろんピョン吉君もこの一員です。

それから、ライオンやトラ・ジャガーなど猛獣の餌になるウサギもいます。食われる側にまわるウサギは可愛そうですが、肉食獣である猛獣は、これを食べなければいきてゆけません。ウサギが可愛そうだからということでやめにしても、ウサギに代る動物を、やはり猛獣には与えなければなりません。私たちの動物園では1週間に1回与えています。

また、近ごろは、家庭でも比較的簡単に飼えるということで、ペットとして可愛がっている人も多いようです。しかし、ピョン吉君がいっているように、いらなくなったら動物園へ寄付してやったらよい、というのでは困ります。飼う前には、最後まで面倒がみられるかどうかをよく考えて、決めてください。

今年はウサギ年。この機会にもう一度ウサギについてよく考えなおし、ピョン吉君からこごとを言われなくなるようにしたいものです。　（Y）

❀動物豆知識❀

固型飼料「ペレット」

動物は、野生では自由に生息地をえらび、多くの栄養に富んだ餌をとり十分な運動をして、たがいに関連を持ちながら生存を続けています。しかし、動物園や各家庭で飼育されている動物には、そのような自由はありません。だから飼育している人間が責任を持ってよい飼育環境を与え、よい飼料を十分に与えなければなりません。

野生の時と同一の飼料が与えられれば一番よいのですが、それは多種多様なので不可能なことです。そこで入手可能なものから、その動物の食性と各栄養素の要求量、嗜好性などを考えあわせて、飼料の種類と給与量を定めます。以前、動物園では単一の飼料を動物によっていろいろと組合わせて与えていましたが、今では、畜産界の機械化、多頭化にともない普及してきた配合飼料を、キジ、ガン、カモその他多くの鳥獣に利用し、更に進んで、マウス、モルモットなどの実験動物を均一な条件下に飼育するために開発された固型飼料をもとに、草食動物のための固型飼料を作成し広く利用しています。

固型飼料は、動物別に各栄養素の要求量を十分考慮して、多くの飼料を混合して作った配合飼料にビタミンやミネラル、病気予防のため抗生物質などを添加して固型化したものです。形や大きさは、動物によって違いますが、当園で使っている固型飼料は円柱形で大中小の3種類あり、その形状からペレットと呼んでいます。ゾウ、カバ、キリン、シカ、バイソン、カンガルー、ウサギ、モルモットその他多くの動物に使っています。

固型飼料の長所は、①品質が均一であり、よりごのみできずバランスのとれた栄養分を摂取できる。②飼料効率がよい＝同一摂取量に対する増体量が大きい。③取扱に便利＝同一重量に対する容積が小さく、運搬、貯蔵によい。④粉末に比べて摂取しやすく、損失が少ない。水分含量も少なく保存がきく。など多くあります。

草食獣用の他に、ウサギ、モルモット、サル、キジ、フラミンゴ、イヌ、キュウカンチョウ、カメ、キンギョ用などあり、動物園ばかりでなく、ペット用に広く市販されています。サル用には、円柱状の他に、クッキー状、カンパン状のものもあります。

（K.M）

できごと

☆10月16日

10月13日にやってきたアンデスフラミンゴ2羽をこの日はじめて群れの中へだしました。その後1羽は10月19日に死亡、現在は昨年にきた個体と合せて2羽を展示しています。

☆11月3日

クロエリハクチョウが産卵をはじめました。うまくゆけば、お正月にはかわいい親子が池にうかんでいることと思います。

☆11月12日

サル舎と小鳥舎の暖房をはじめました。動物園では熱帯産の動物がたくさんいるので暖房をする所が多く、この春完成した爬虫類館は、10月1日からすでに暖房を開始しています。

☆11月16日

ニホングマのおすが死にました。9月19日に発病以来、何回かつかまえて治療をくり返し、一時はかなり元気になったのですが、この日、ついに力つきたものです。死因は肝臓癌でした。飼育期間は25年6カ月3日でした。

☆11月18日

ジャガーが2頭生まれました。この母親はいつもこどもを生みっぱなしで、面倒をみないため、人の手で育てます。こどもはおす（770g）とめす（740g）でした。

☆12月7日

キリンが生まれました。過去4回は全ておすでしたが、こんどはじめてめすが生まれました。妊娠期間は465日。「衣笠」と命名されました。

☆12月8日

タンチョウの幼鳥を1羽保護しました。この鳥は12月6日、府下網野町の民家へ落ちたもので、幸い外傷はみあたりませんでしたが、特別天然記念物でもあり、関係省庁の指示があるまで、当園で元気を回復させてやることになりました。（Y）

■ 第12号の発行は4月1日（火）の予定です。
■ 定期購読を希望される方は80円（1年分）を同封して動物園技術課までお申し込みください。

動物園だより　No.11　編集・発行人　林田礼俶
発行所　京都市動物園
京都市左京区岡崎・岡崎公園内　TEL 075（771）0210・0211